



仲間の表現の多様性やよさに気づき、共に世界を広げる

英語科

山口 修司 ・ 柏 敬太

I 教科研究内容

1 英語科における「自律」と「共栄」に向かう学び

英語科における「自律」と「共栄」に向かう学びでは、即興で伝え合うことを通して、どのような表現を伝えられないのかを捉え、言語・内容の両方から学びの見通しをもつ必要がある。その上で、「自律」に向かう視点として、聞き返し・言い換えなどのコミュニケーションにおける方略、使用する単語や文法事項などの言葉を全体で共有し、それらを目的に応じて選択できるようにする。あるいは、どのような文章構成で伝えるとよいかを計画したり、方略・言葉などの資源と、発表に向けた練習の方法とを組み合わせた計画を立てたりできるようにする。その上で、「共栄」に向かう視点として、考えた表現について黒板で思考ツールを用いて比較・分類・理由付けを行ったり、それぞれの表現のもつ違いやよさ、新たに取り入れることのできる表現を共有する場を設定したりする。そのような学びの中で、選択した言葉や立てた計画の正確さや適切さを確かめ、成果と課題を明確にしなが、必要に応じて選択・計画し直したりできるようにする。

1年次研究では、辞書などのツールを含めた資源の選択や文章構成の計画を行い、考えた表現を可視化したり、多角的に捉えたりすることのできる手立てを講じることによって、互いに高め合う学びを実現することができた。しかし、選択したツールや文章構成の計画と本時の目標や学習課題との関わりが弱く、課題達成とのつながりを生徒自身が見いだすことが十分にできなかった。

そこで2年次研究では、スピーチ、ディベートといった言語の使用場面に応じた異なる種類の単元シートを用い、過去の「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を活用できるようにした。加えて、情報格差を生かした新たな手立てを見だし、ALTなどの英語話者に伝える活動でなくとも、なぜ伝わったのか、伝わらなかったのかを生徒自身が自覚できるようにした。それにより、生徒自身が文法事項や単語を選択し直したり文章構成を計画し直したりし、「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果や課題を明確にすることができた。

一方で、2年次までの手立ては、過去の単元で明確にした「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果や課題を活用する手立てが多く、中学校入学後間もない段階での実践が難しかったり、なじみにくい題材・言語の使用場面があったりした。また、選択する資源の種類が道具・方略・言葉と多岐にわたっており、より課題解決との結び付きを生徒が実感できる資源の選択や計画はどのようなものを精選した方が、「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てが一層機能すると考えた。

そこで最終年次は、選択する資源や立てる計画の内容を精選するとともに、2年次に追加した、情報格差を生かした手立ての改善、そして新たな手立ての構築を行うこととした。

このような「自律」と「共栄」に向かう学びによって、教科の本時の目標を達成するとともに、「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を明らかにすることができ、知を獲得する。そうしてコミュニケーションに達成感や喜びを感じ、「英語をもっと学びたい」と自ら学ぶ意欲を生み出すことができる。

その先には、コミュニケーション能力を育んだり、文化的背景の異なる他者と分かり合ったりするために、自ら他者や対象に働きかけ、共に知を創り築き上げる姿が期待される。また、理想の姿のために自らを更新していくことができる生徒を育むことが可能となる。

2 英語科における「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てと期待される生徒の姿

- (1) 思考ツールを活用した文章構成の計画と共有
- (2) 目指す姿とその視点・条件を明確にした学習展開と中間発表の場の設定
- (3) 受け手を踏まえた多角的な思考を促す学習展開
- (4) 言葉の再選択を促す、情報格差活動を生かした学習展開
- (5) 表現の正確さへの気付きを促すトライアル&エラー

(1) 思考ツールを活用した文章構成の計画と共有

学年が上がり、内容が高度化するにつれ、個々の事実を伝えるだけでは、伝えたい内容が相手に十分に伝わらない場合がある。そのような段階においては、「自律」に向かう視点として、相手に伝わりやすい文章構成を計画した上で表現を考えていくことが重要となる。「分類」や「理由付け」を目的とした、クラゲチャート等の思考ツールを使用することで、生徒が内容のまとまりごとに文章構成を計画することが可能となる。例えば、環境問題に関するスピーチを行う授業において、原因・問題・解決策の例など、伝えるべき要素を踏まえて、どの要素をどの順序で伝えるかを含めて、文章構成を計画する。

そのようにして考えた表現について、個人で使用したものと同一思考ツールを黒板で使用し、学級全体で共有する。これにより、まとまりのある英文についても、「共栄」に向かう視点として「仲間の表現のこの部分が優れているから、自分の表現に生かそう」と自他の表現と比較して取り入れ、互いに高め合うこととなる。また、当初の計画で挙げられた要素のうち、英文を作成できていないものがある場合は、「他の仲間が必要としている要素を自分たちが考えてみよう」と学級全体で考えた文章構成を完成させる。

加えて、場面ごとに共通した単元シートを用いて、過去の同様の言語の使用場面で自分が立てた計画を想起する場面を設定する。これにより、同様の場面においてどのような文章構成を計画し、どのような文章構成がその言語の使用場面では効果的に伝わるのか、過去に明確にした「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を活用することができる。

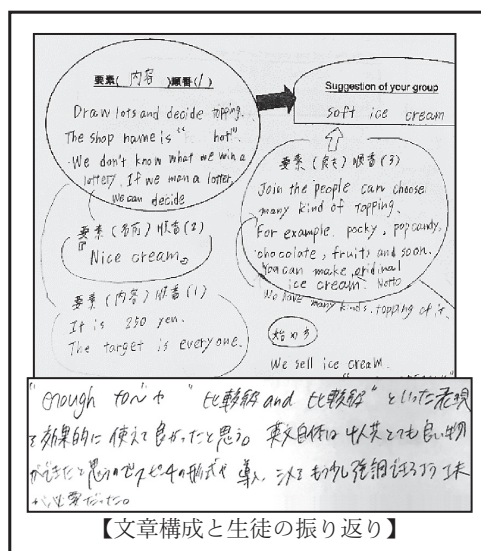
期待される生徒の姿として、最初は教師からの促しによって、生徒は過去の単元シートで明確にした「自律」と「共栄」に向かう学びの成果と課題を活用する。しかし、回数を重ね、知の獲得とのつながりを実感するにしたがって、生徒自身がその価値を感じ、スピーチやプレゼンといった言語の使用場面に応じて過去の単元シートを確認したり、その際に得た効果的な文章構成を仲間と確認したりしながら本時における文章構成を計画する姿が期待される。

そのような授業の終末では「スピーチで伝えたい表現について伝えることができた」という教科の学習内容に関する知に加え、「目的に合わせて文章構成を計画し直したから解決することができた」という「自律」と「共栄」に向かう学びの過程についても知を獲得し、学ぶ意欲を生み出すことができる。

(2) 目指す姿とその視点・条件を明確にした学習展開と中間発表の場の設定

「自律」に向かう視点として、プレゼンテーションなどの発表や書くことを中心とした活動において、目指す姿とその視点・条件を明確にして計画を立てる。この手立てにおける視点とは、課題意識を生徒がもった際に、どのような内容を話すべきかを共有して示したものであり、条件とは教師から提示されたものである。具体的には、「魅力的なプレゼンを行う」等の目指す姿を共有し、その目指す姿の達成のために必要な視点はどのようなものか、生徒たち自身に考えるよう促す。例としては効果的にナンバリングを用いたり、疑問文からプレゼンを始めたりするなどの工夫が考えられる。同時に、プレゼンテーションにおける時間の制限などの条件を生徒に示す。このように目指す姿を共有した上で条件を示し、視点を生徒たち自身が設定する学習展開を行う。

最終年次では、2年次まで行ってきた辞書などのツールの選択ではなく、適切な文法事項などの言葉の選択を行うこととする。そして、リハーサルに関する方略は、2年次同様、同じグループの仲間と表現を聞



いて評価し合うこと、ICT機器を用いた録音・録画などを、生徒たちが目的に応じて組み合わせて計画する。

その後、「共栄」に向かう視点として、グループでの中間発表の場を設定する。その際に視点・条件を踏まえて中間発表を行うことで、期待される生徒の姿として、話すことが苦手な生徒も、共通の視点・条件について話し合うことで、役割意識をもち、相手を高めようとする意識が生まれる。そうして自分たちの気付かなかった点について指摘し合い、互いに高め合うこととなる。同時に、自分や相手の発表が、どの部分では十分達成されていて、どの部分では改善する必要があるのか、あるいはプレゼンテーションに向けてどのように計画の修正を行う必要があるのか、共通の視点をもって指摘し合うことになるので、



「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題も明確となる。期待される生徒の姿として、中間発表の後、指摘された内容を踏まえ、視点・条件を達成するためにリハーサル方法を変更するなど、計画を適宜修正する姿が期待される。

授業の終末では、「自分たちのプレゼンテーションではこのような表現を用いて学習課題を達成できた」という教科の内容に関する知に加え、「計画を修正し、表現を考えたからうまく伝えることができた」という「自律」と「共栄」に向かう学びの過程に対する知も獲得し、学ぶ意欲を生み出すこととなる。

(3) 受け手を踏まえた多角的な思考を促す学習展開

この手立ては、ディベートなど複数の立場から表現を考え、高める授業において講じることができる。「自律」に向かう視点として、導入のリスニングやリーディングの中で、活動の終末で伝える受け手に関する具体的な情報を示すことで、生徒は、同学年の英語学習者やネイティブスピーカーといった、聞き手や読み手を意識し、相手に応じた言葉や方略を選択するようにする。

そのような受け手を意識した展開において、「共栄」に向かう視点として、複数の立場からの意見を踏まえ、使うべき表現を多角的に考えられるような学習形態を手立てとして講じる。例えば、賛成・反対・ジャッジに分かれて行うディベートの授業において、自分たちの立場の意見を論理的なものにするために、グループの数名があえて自分たちと対立する立場になりきって反論を行うミニディベートを設定する。このような場を設定することにより、生徒は相手への再反論の必要性に気付く。そして、“I agree with you in that point. However, in my opinion,…”と相手の立場を踏まえた表現を考え、自分たちの立場の意見を質の高いものとすることができ、互いに高め合う学びとなる。

また、その際、「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を明確にするために、最終的に伝える受け手を想定し、表現の伝わりやすさを確認する。例えば、年下の英語学習者であれば既習語彙による制限を行い、ネイティブスピーカーが聞き手の場合はICT機器の音声認識機能を用いる。また最終年次の実践から、ネイティブスピーカーに伝える場面を設定し、アドバイスを得ることも有効であった。

そのような場面を設定することで、期待される生徒の姿として、生徒は「調べた単語が伝わらない。言い換えを使って伝えなおそう」「発音記号を確かめよう」と、相手に応じた言葉や方略を再選択する。そうして、自分の選択した資源に対する効力感や課題意識をもつとともに、自分の表現の質の高まりを実感することができ、学ぶ意欲を生み出すこととなる。

(4) 言葉の再選択を促す、情報格差活動を生かした学習展開

英語科において生徒が「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を実感する上で、自

分の表現のどの部分が伝わり、どの部分が伝わらなかったのかを明確にすることが大切である。この手立てでは、情報格差を軸とした学習活動を設定する。2年次では、描画タスクなど限られた活動における手立てであったが、最終年次の実践の中で、情報格差のある中での、海外旅行先のトラブルなど、教師が設定した場面を解決するために、合意形成や交渉を行う言語活動においても有効であった。

まず、「自律」に向かう視点として、導入で即興的に英語を話す際、事前にどのような単語や文法事項などの言葉の選択を行えば、相手に伝えることができるかを考え、ワークシートに記入するよう促す。そして、情報格差がある活動において相手に伝えることで、生徒は正確な情報や意図が伝えきれないことに気付く。その後、「共栄」に向かう視点として、同じ情報をもつ生徒同士でグループになり、表現を考える場を設定する。それぞれ伝わらなかった部分が異なっているため、期待される生徒の姿として、「この文法事項や単語を使った方がより適切に伝わるのではないか」と適切な言葉を選択し直しながら、二度目の情報伝達の場面に向けた表現を考える姿が期待できる。

その後、再度同じ場面や状況を伝える活動を行うことにより、自分たちが考えた表現による一度目と二度目の伝わり方の違いに気付くことができる。授業の終末の振り返りにおいては、「相手と英語で交渉を行い、目的を達成できた」といった本時の目標に関する知とともに、「このような単語や文法事項を選んで伝え直したから正確に伝えることができた」と再選択した言葉に関する知を獲得し、学ぶ意欲を高めることとなる。

【状況 A①】あなたは留学中の大学院生です。大学の図書館で、パートタイムで働いています。明日、6時間のシフトがありますが、長いレポートの締め切りが明日までなので、同じ仕事をしている大学院生 (Joe) に、明日のシフトを代わってもらえないか、頼む必要があります。依頼をしてください。

Shall ~ ? 謝辞 条件は ~ です
Please ~ どうか ~ お願いして

① I'll help you with your housework instead of you will work more than before.

<Reflection>
自分に「F」があったら「I'm sorry」はしるべきで「成意」(成意) である。AとBは「F」か「I'm」の条件を提示して「解決」できた。Dは

【単語の再選択と授業後の振り返り】

(5) 表現の正確さへの気付きを促すトライアル&エラー


中学生段階では、自分の英文の誤りに無意識のうちに気付き、自ら修正する能力が十分に身につけていない場合が多い。この手立てではその特徴を踏まえ、話すこと・書くことにおける正確さに焦点を当てる。

「自律」に向かう視点として、即興でペアに伝えたい内容を話した上で、正確な英文で伝えるための文法事項や単語の選択を行い、ワークシートに記入する。そして自分が担当する英文を考える時間を設定する。グループ内でお互いに作成した英文が正確なものとなっているかを確認した後、書く活動においては、教師が、生徒が作成した英文に修正する箇所があることを伝える。話す活動においてはその英文でどのような説明になるのか、生徒が話した英文が意味する内容を、教師やALTが教具を用いて再現する。生徒は「どの部分を修正すれば正しく伝わるのだろうか」と文章構成の改善の必要性や言語の再選択の必要性に気付く。

その後、「共栄」に向かう視点として、生徒が英文を完成させる過程で、同じ英文を担当している仲間と英文を比較する場を設ける。これらにより、期待される生徒の姿として「異なる前置詞を使う必要があるのではないか」などと言葉を選択し直し、「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を明確にししながら、「相手のこの表現を参考に文構造を考えてみよう」と共に高め合うことが期待できる。そうした試行錯誤、言葉の再選択を促す展開により、終末では「正確な英文で伝えることができた」といった本時の目標の達成だけでなく、「適切な前置詞を選択することで課題が解決した」といった、資源を選択したことが有効だったという「自律」と「共栄」に向かう学びの過程に関する知を獲得し、学ぶ意欲を生み出すこととなる。

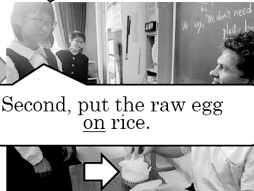
前置詞の選択 in

Put rice in an egg.



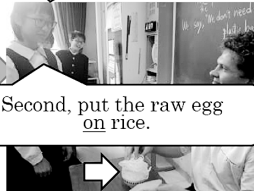
前置詞の再選択 in ↓ on

First, break an egg.



先に卵を割ることを伝えるべき

Second, put the raw egg on rice.



【言葉の再選択の流れ】

II 実践例

第3学年

If the World Were a Village of 100 People

英語科
実践例

題材の目標

本題材においては、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせて、以下の資質・能力の育成を目指す。

- (1) 仮定した文や自分の考えを伝える際の表現、言語の働きを理解するとともに、ポスターの作成において活用できる技能を身に付けることができる。
- (2) 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしながら把握した内容に基づき、事実や自分の考えを表現することができる。
- (3) 聞き手や読み手に配慮しながら話したり、書いたりしている。

授業の実際と見取ることのできた「自律」と「共栄」に向かう学びにおける生徒の姿

(5) 表現の正確さへの気づきを促すトライアル&エラー

本授業では、環境・貧困・平和などの地球規模の問題を啓発するポスター作成に向けた活動の一環として、『世界がもし100人の村だったら』（ダグラス・ラミス著、マガジンハウス）に掲載されている情報を英文で再構成する授業を行った。

「自律」に向かう視点として、事前にどのような文法事項の選択を行えば正確な英文を書くことができるのか、個々で選択した上で英文を作成するようにした。完成した英文について、教師は、英文の修正が必要であることを伝え、正確な表現となるまで生徒がホワイトボードを用いて繰り返し英文を修正できるようにした。また、「共栄」に向かう視点として、同じ英文を担当している仲間と表現を比較する場を設けた。生徒それぞれが英文を完成させる過程でこのような場を設けることにより、生徒は必要感をもって仲間と文章を比較することができた。これらにより、「自律」と「共栄」に向かう学びにおける生徒の姿として期待された、「前提を踏まえて仮定法を用いた英文にする必要がある」と、ホワイトボードに作成した自分の英文を書き直しながら、選択した文法事項を選択し直す姿が見られた。また、「『思うように』という表現を仲間のthey wanted, but～で表そう」と互いの表現を取り入れて高め合う姿が見られた。

その上で、考えた内容を簡易ポスターとして提示し、感想を述べる場を設けた。最初は、表現の正確性に注意が向くあまり、ポスターとして読み手に訴えかける文章とすることを意識せずに表現を考える姿が見られていた。しかし、ポスターとしての感想を共有することで、生徒は「どうしてほしいのか、具体的な方法を伝える必要がある」と読み手を意識した英文に改善する必要性を感じた。そうして、状況を仮定する英文と、解決のために必要なことを伝える英文を組み合わせることで、“If the world were a village of 100 people, 12 people would be hungry because of climate change. However, if we donate, we can change the situation.”などと仮定法と直接法を使い分けた表現とすることができた。

そうした再選択を促し高め合う学習展開により、振り返りでは「正確な英文を書くことができた」という本時の目標に対する知だけでなく、「仮定法を用いて書くことで正確な英文となった」など、文法事項を選択し直したことが

有効だったという「自律」と「共栄」に向かう学びの過程に関する知を獲得し、自ら学ぶ意欲を生み出すことができた。

①
If the world became a village (living
100 people, twelve people always feel
hunger because of the war and the climate
change
自命漢字の修正
→ If we eat everything served to us,
we can reduce garbage.

<本時の振り返り>
もしも～(24)が、というはとせよと、現字の本が無いから、実際に自分=2年生で、
何(か)法(則)かというのを、直接法・仮定法 どの(か)で、意味(を)い(ふ)て(き)か(す)る
こと(が)出来(た)。

【仮定法と直接法を使い分けた英文と授業後の振り返り】

第1学年

Picture Description Using Present Tense + Present Progressive Tense

英語科
実践例

題材の目標

本題材においては、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせて、以下の資質・能力の育成を目指す。

- (1) 現在形・現在進行形の機能と使用場面の違いについて知り、まとまりのある英文の中で正しく相手や第三者の動作・状態を理解することができる。
- (2) 必要に応じて現在形・現在進行形を使い分けながら、適切に自分や第三者の動作・状態を表現することができる。

授業の実際と見取るのことでできた「自律」と「共栄」に向かう学びにおける生徒の姿

(3) 受け手を踏まえた多角的な思考を促す学習展開

多くの使用例に触れたり、実際に自分で話いたり、書いたりすることで、学習した文法や既知の語彙に対する理解を深めることを目的として、本実践では現在形と現在進行形の違いに注目しながら、写真の中の人物と動物について描写しながらストーリーを創作する課題を設定した。

既習事項としての現在形と現在進行形、それぞれの働き或使用場面について、頭では理解していても適切に使い分けることは容易ではない。英語の不得意な生徒でも一定の範囲の中から語彙を選択して、活用できるよう、使用可能と思われる名詞と動詞を学級全体で共有した。

受け手となる仲間を楽しませようとする他者意識と客観的視点をもつことで、意味のない英文をただ羅列するのではなく、使用する語彙やその活用（選択した動詞を現在形と現在進行形のどちらで用いるのか）まで、選択した動詞の働きを様々な角度から見つめたり、試作した英文の意味を様々な場面に当てはめてみたりすることで、多角的な思考を促すことをねらった。

実際に活動を行うと、想定されたとおり上述のような困難さが露出し、着想の手がかりとなる、事前に共有した語彙が大いに役立った。同時に、活用した動詞や、試作した英文を何度も見直ししながら、それらの妥当性やストーリーとしての一貫性を客観的に判断しようとする姿が見られたことは成果であった。更に、そうした点を確認したい、仲間はどうのような英文を書いているのか知りたい、といった思いから、自然に隣や前後の生徒同士で見せ合い、質問や助言を交わし合いながら互いの英文の言語的、内容的な質を高め合う姿が見られた点は「共栄」に向かう視点における成果といえる。“An old man likes fishing. He is fishing with a bear.”という写真の様子を描写しただけの英文を、“An old man usually fishes alone. But now he is fishing with his friend.”といった写真の背景までを想像しながら適切に現在形と現在進行形を使い分け、その働きを効果的に活用できた生徒も見られた。

一方で、数名に英文の発表を促し、聞いている生徒がそれらを参考にしながら自己の英文を見直す機会とすることをねらったが、内容の面白さを感じたり、表現の工夫には気付いたりしたものの、多くの生徒は自己の英文の改善や修正に生かすところまでは至らなかったことが課題となった。これは、単文の内容整理や言語操作は一人でも可能だが、複数の英文にまたがる、まとまりのある文章の構成となると、急激に言語操作の難易度が高くなるためだと考えた。仲間と共に英文を作り、その質を高め合う姿は見られたことから、ペアやグループを意図的につくり、協同で内容整理や文章構成に取り組むことで、個人では言語操作に焦点化できるような学習形態・展開等を工夫した実践を行いたい。



英文を見合い、質問や助言を交し合う場面

Ⅲ 今次研究で見えてきたこと

今次研究が始まった段階では、生徒は文章構成などの伝わりやすさに関する、ある程度の納得解を得ることはできても、それが本当に正確な表現になっているのか不安が残ることがあった。あるいは表現が伝わり課題の解決はできたが、何が解決に役立ったのかを十分に自覚しておらず、「自律」と「共栄」に向かう学びにおける知の獲得が不十分であった。しかし、手立て(1)や(2)に関しては、3年間の実践の積み重ねによって、「以前に活用した『主題—根拠や具体—主題の言い換えや要約』などといった文章構成が今回の場面においても活かすことができるのではないか」などと、過去に計画した文章構成やリハーサル方略の成果や課題を活かして、言語の使用場面に適した計画を立てることができるようになった。特に、過去の「自律」と「共栄」に向かう学びの過程における成果と課題を活用することについて、教師の促しではなく、自ら進んで過去の計画を単元シートや口頭で仲間と確認し合う姿は、今次研究が始まった段階では見られなかった姿である。

また、手立て(3)、(4)、(5)に関して、聞き手や読み手を踏まえた課題の解決のために、選択した理由を明確にしなが言葉の選択をし直すことができるようになった。その結果、自分の言いたい表現を直接的に表す、使い方の分からない未習語をむやみに使ってみるのではなく、自分の使用可能な言葉を選択しながらより相手に伝わるものを吟味したり、辞書で新出単語を用いる際にも、品詞や冠詞をよく確かめた上で使用したりするなど、言葉の選択に対する質的な高まりが見られた。その結果として、互いに表現を高め合う際の内容がより確かで豊かなものとなり、生徒は知を獲得し、学ぶ意欲を生み出すことができた。

また、今次研究の3年間の積み重ねにより、これまでの意欲の高まりが次の英語の授業における学びにも影響する生徒の姿を見取ることができた。具体的には、解決の困難な課題に直面した際にも、繰り返し英語で状況を伝えようと粘り強く解決に向けて活動に取り組む姿や、仲間とともに英文の作成に取り組むことで解決できるという経験を重ねてきたことで、他者との学び合いに価値を感じ、授業の中で他者との関わりを進んで求めていく姿が見られた。

そのような「自律」と「共栄」に向かう学びの積み重ねにより、コミュニケーション能力を育んだり、文化的背景の異なる他者と分かり合ったりするために、自ら他者や対象に働きかけ、共に知を創り築き上げる姿、理想の姿のために自らを更新していくことができる生徒を育むことができた。

Ⅳ 参考文献

- ・秋田喜代美『学校教育と学習の心理学』岩波書店、2015年
- ・江利川春雄『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店、2012年
- ・鹿毛雅治『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房、2013年
- ・自己調整学習研究会『自己調整学習 理論と実践の新たな展開へ』北大路書房、2012年
- ・白畑知彦『英語指導における効果的な誤り訂正：第二言語習得研究の見地から』大修館書店、2015年
- ・高垣マユミ『授業デザインの最前線Ⅱ 理論と実践を創造する知のプロセス』北大路書房、2010年
- ・辰野千寿『学習方略の心理学』図書文化、1997年
- ・津田ひろみ『学習者の自律をめざす協働学習』ひつじ書房、2013年
- ・中田賀之『自分で学んでいける生徒を育てる 学習者オートノミーへの挑戦』ひつじ書房、2015年
- ・深谷達史『メタ認知の促進と育成 概念的理解のメカニズムと支援』北大路書房、2016年
- ・村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年
- ・Dale H. Schunk, Barry J. Zimmerman『自己調整学習と動機づけ』北大路書房、2009年
- ・Edward L Deci, Richard Flaste 『人を伸ばす力—内発と自律のすすめ—』新曜社、1999年
- ・Lummis, C. Douglas『世界がもし100人の村だったら』(池田香代子翻訳) マガジンハウス、2001年